
君に伝えたい事

彌釣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に伝えたい事

【著者名】

NO826C

【作者名】

彌釣

【あらすじ】

知哉とある少女そしてこの行方は…

第一話（前書き）

三日月夜をがいまいちな人に

第一話

俺

専門生の俺は現在一年だ。君とは小学校から高校まで一緒にいたよ。あれからもう5ヶ月になっても君の事で忘れない。高校で伝えておきたいけど…言えなかつた。

俺は他の人と違う、どじだしどろくさいし、何やつても失敗ばっかり。けどね、そんな俺は取り柄は一つあるよ。約束は絶対守ると…

私

私は貴方の事ずーと世話してた。小学校から高校までね。貴方と違つて成績やスポーツ得意な訳で学校でのアイドル的な存在だった。そんな私から貴方は疎外感を感じていた。誰にも話かけらずに。そんな貴方は相談する相手は先生と私だけだった。でも貴方は先生や私のアドバイスを約束だと思って約束を果たした。あの時の私は嬉しかつた。

そんなある時だつた。『おーい知哉、何かさ最近綺麗な女人見たよ。』

俺は『はあ、今時にそんな人見掛けんぞ。』親友の浩平は嘘を着いて居なかつた。『だったら見に行つて見ろよ。』と浩平は言つた。『…まさか偶然なのか。いあメールもしてないのに、いきなりこつちに現れるなんて』と知哉は言つた。『どうだつた?』と浩平は聞いてきた。『なんつうか。幼馴染みがいきなり来て驚いた。』と言つた。

『え。あれお前の幼馴染みかよ。』と驚いた浩平だつた。しかし、俺は君にまだ言い伝えてないというか、言い出す勇気がないのだ。

第一話（前書き）

主人公知哉と百合菜の関係は複雑な関係しかし一人は誰とも付き合つて無いのにどちらも気を遣っていた。

第一話

俺

ああ、昨日は君の姿を見たよ。でもまだ言い勇氣ない。だつて俺今
でも君に彼氏いるかいなかで不安だから：

私

昨日ね。貴方の姿を見たよ。それでも、声かけずらかつた。だつて
貴方に彼女いるか不安だもの。俺

あ、でも君の事好きだけどこれだけ言えるよ。高校の卒業の時桜の
木に残した言葉だ。俺と君は見えない愛の絆で結ばれると。

私

私は貴方に気を遣つてるかと思ったよ。ねえ高校の事覚えている?
高校の卒業の時貴方が私を呼んで、桜の木に刻んだ言葉。そう私と
貴方は見えない愛の絆で結ばれている。

そしてある日一人にはそれぞれの道がある。『なあ、知哉。お前さ
就職何にする。』と浩平が聞いてきた。

『俺か?んー小説家カルポライターやるかなあと思つてる。』『ル
ポライターつてあちこち回つて写真をとつて自身のホームページに
載せる奴だろ。』

『そだよ。俺はノートパソコンあるし。カメラだつてあるから大丈
夫だよ。』

『まあ、それなら言つ必要無いか。まあ頑張れ。』と浩平は俺に言
つた。

『ああ頑張るよ。ルポライターなら彼女に届かない思いを届ける
と思う』『ねえ、百合菜つて将来どうすんの?』
友達の妻が聞いてきた。

『私は、カメライターになるかなあと思つ』

『ふーん、頑張つてね』 うーん、カメラがないだよね。デシタ
ルのが。』

『だつたらあの人頼めば。』と姜がいった。

『あの人ね。有るけど。また嫌われそうかも…』と百合菜が不安な
顔で言った。そう彼（知哉）に嫌われそうかもしれなかつた。

第三話（前書き）

二人の再会そして二人の休日の出来事。まだまだ一人の思いは決意
はしてはいなかつた

第二話

俺

今日は祝日だ。なにもやることがない。だから外に出た。かと言つて何もやる事無いのに懐かしい公園にきた。そこには君と初めて会つた場所：

私

今日は祝日、外出してどうかで暇潰し田的で公園にきた。ここは貴方と会つた場所だった

そんな二人が再会した。『…！百合菜』
と知哉がびっくりで起き上がつた。『ふふ。久しぶりね。こうして貴方と会うのは3ヶ月ぶりだね。』と百合菜は言つた。『ああ、かれこれ、3ヶ月ぶりだな。』

『まあ知哉は変わつて無いね。』と百合菜は笑つてい言つた。

『ふつ。まあ、これでも百合菜に見付けやすいように変わらないようにしたけど。百合菜は彼氏とかいるのか？』と知哉は百合菜に聞いた。

『いないよ。そうゆう知哉はいるの？』と聞き返した。

『俺か？いないな。もてないからな。』と言つた。そして、二人ともはホッとした。

そして、知哉はある事を告げた。

『百合菜、あの卒業の事覚えてる？』と訪ねた。

『覚えてるよ。3ヶ月立つてまたあの桜の木に行くという事でしょ。』

『ああ、そうだよ。一人での約束の場所へ行こうとして、昔の事や今のこと語ろう。』

百合菜は『そだね。明日行こう。約束の場所にそして昔見たく笑つたり泣いたりしながら語ろう』

一人の時間はまだまだある。そうあの日からの続きだから。

(俺は百合菜に合わせなきやいけない。何もかも)

と知哉決意を胸の中で誓つた。

(明日か。やっぱ私は知哉を見て一瞬分かつた。私と合わせてるだつて)百合菜は薄々氣づいていた。

一人の時間はまだまだある。そうあの日からの続きだから。

(俺は百合菜に合わせなきやいけない。何もかも)

と知哉決意を胸の中で誓つた。

(明日か。やっぱ私は知哉を見て一瞬分かつた。私と合わせてるだつて)百合菜は薄々気づいていた。

最終話（前書き）

短いけど。これにて君に伝えたい事は終了です。

俺

ついに来た待ち合わせの日そして言わなきやいけない事がだから言おう。自信は無いが言わなきや損するかもしれない。

私

ついに来ちゃった。待ち合わせの日だね。私は何から話せば良いのか分からぬけど貴方も何かを話そうと決意あるんだよね。だから私も全部話すよ。

その一人が桜の木まで来た。早く来たのは知哉だった。『…言わなきや損はするよな。』と不安な顔をして言つてる。そして5分後百合菜も到着した。『はあはあ、お待たせ』

百合菜は走つて来たから疲れた表情で言つた。『まあ、まず息整えてくれ』と知哉は言つた。そして10分後『なあ、百合菜…俺さ前から言いたい事有るんだよ。聞いてくれるか』

『私も言いたい事有るから先に言つて』
と百合菜は言つた。

『分かつた。：改まってだけど俺百合菜と別れて3ヶ月立つた。でも昔と気持ちは変わらない。だから俺と一緒に居てくれるか？』
と知哉は言つた。

『分かつたよ。私もね、知哉と離れてから3ヶ月立つた私も気持ちは変わらないままだつた。そして今こうして一人で居るからズーと私を守ってくれる?』と百合菜は言つた。

『うん守つてやるよ。これからもこの先もズーと君を守つてやるよ
と知哉は言つた。

そしてあの二人は強い絆で結ばれていた。そう一人が書いた日記それこそ二人の愛の絆だからだから一人はこう言つ。『それは永遠の愛』と言つ。

『俺達の愛は誰にも切れない絆だから』

『私達の愛の絆は誰にも壊されないそう強く結ばれて居るからと二人は強い愛の絆で結ばれているのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0826c/>

君に伝えたい事

2010年10月9日21時14分発行